







『復古編』・『増修復古編』小篆字形対照表 解題

広島大学総合科学部 鈴木俊哉

本表は、北宋・張有『復古編』とその増補本である呉均『増修復古編』について、小篆字形を切り出して対照表としたものである。増修復古編が含む小篆 1737 項はすべて示すが、復古編にあつて増修復古編に採られていない小篆(218 項)は略している。材料とした資料は以下の通りである。

- A) 『説文解字』(南宋刊元修大徐本) 海源閣旧蔵 国学基本典籍叢刊影印
- B) 『説文解字五音韻譜』(南宋刊本) 中国書店影印
- C) 『復古編』 黄丕烈旧蔵影宋写本 四部叢刊三編所収
- D) 『復古編』 元・好古齋刊本 中華再造善本所収
- E) 『増修復古編』 汪啓淑旧蔵明初刻本 北京図書館珍本叢刊所収
 『増修復古編』 繆荃孫旧蔵明初刻本 北京図書館現蔵 善本書号 7331
 『増修復古編』 吳騫旧蔵写本(登録号 rarecatx0223446)

1. 凡例

		海	宋五	復宋	復元	増修	
ZX-FGB-0001	海:巻08上.01a.g02 復宋:巻01.001a.g01 増修:巻1.01a.g01						儻/FGB-0001
ZX-FGB-0002	海:巻05上.02b.g15 復宋:巻01.001b.g01 増修:巻1.01a.g02						箆/FGB-0002
ZX-FGB-0003	増修:巻1.01a.g03						逢鼓

表の各欄は左から以下の内容を示す。

① 項番

ZX-FGB-dddd の形式で増修復古編の掲出順に示す(ZX-FGB-0001~1737)。順序は北京図書館珍本叢刊影印の汪啓淑旧蔵本に従うが、脱葉や判読できない部分は他本で補っている(後述)。

② 掲出箇所

大徐本説文解字(海)、影宋写本復古編(復宋)、増修復古編(増修)の掲出位置を示す。掲出箇所が、巻 1・葉 2 右・頁内見出し番号 3 であれば、巻 01.002a.g03 のように示す。葉の中での頁の右・左を a(右)、b(左)で示す。見開き装丁の場合には右側が b、左側が a になることに注意されたい。

増修復古編は上下巻という構成だが、葉番号は四声別に振りなおしている。そこで検索の便のために、平声を巻 1、上声を巻 2、去声を巻 3、入声を巻 4 とした。切韻以来の韻書では上平声・下平声を分けて五部構成にすることが多いが、増修復古編ではこれを分けず全体を「平声」にまとめている。

③ 海

国学基本典籍叢刊の南宋刊元修説文解字(海源閣本)の小篆字形。

④宋五

中国書店影印の南宋刊説文解字五音韻譜の小篆字形。

⑤復宋

四部叢刊三編影印の復古編(黄丕烈旧蔵影宋写本)の小篆字形。

⑥復元

中華再造善本影印の復古編(好古齋元刊本)の小篆字形。

⑦増修

順序は北京図書館珍本叢刊影印の汪啓淑旧蔵本に従うが、脱落している部分は繆荃孫旧蔵本で補った。

両本でも判読できない部分は台湾国家図書館所蔵の呉騫旧蔵写本で補っている。

⑧対応 UCS 漢字、および復古編項番

小篆を指示可能な UCS 漢字の主なものを示す。日本の常用漢字対応のため新字体も含む。また、字形が似ているが字源・字義が異なるものも含む。増修復古編と復古編はどちらも韻書排列だが、配列順序が異なるため、復古編諸版小篆字形対照表での項番も示した。

2. 増修復古編について

2.1. 復古編との関係について

増修復古編の著者である呉均は事跡未詳であり、成書年代ははっきりしない。四庫全書提要では黄氏韻會が引かれていることを根拠に成書を元代と考えている。北京図書館珍本叢刊では汪啓淑旧蔵本は明初刻本としている。繆荃孫本が含む張美和の序が『六書本義』の書名を引くことから、この序文は六書本義が成立した洪武 11 年以降に書かれたと考えられる。また、復古編の影宋写本が含まず元刊本が含む「𠄎」が増修復古編にも見えることから、元刊本を底本として増補と見て良いであろう。すると、元末の至正年間以降の成書となるので、成書そのものが明代という可能性もあるだろう。

増修復古編の見出し小篆 1737 項のうち、1021 字は復古編の見出し字と重なっている。また、序文では復古編を「復古舊編」と呼び、巻頭の著者として張有を編輯、呉均を増補と記すことから、呉均は増修復古編を(復古編が無くても)単体で使えるものを想定して編んだと思われ、配列も復古編とは若干異なる。序文において注釈音義を許氏説文と黄氏韻會を用いて補ったとするが、排列をどのように改めたかは説明が無い。四庫全書提要では中原音韻の影響を指摘しているが、排列はまず四声で分ける古典的な韻書の構造になっている。

2.2. 版本について

増修復古編の版本で最も広く参照されているのは、北京図書館珍本叢刊や續修四庫全書で影印が流通している汪啓淑旧蔵の明初刻本であろう(北京国家図書館善本書号 7332, 原本では巻頭・巻末、第 1 冊葉 14 などに蔵書印があるが、両影印出版とも北京図書館と涵芬樓以外の蔵書印を塗りつぶしており、旧蔵者が分りにくくなっている)。四庫全書提要の執筆においても汪啓淑旧蔵本を参照したことが書かれている。汪啓淑旧蔵本には序文は無く、冒頭の凡例の右頁は補抄である。また、平声葉 14 全体と、去声葉 01 右頁が脱落している。去声葉 12 には小篆字形が完全には読み取れない部分がある。

汪啓淑旧蔵本と同版と見られる繆荃孫旧蔵本も北京図書館に所蔵されている(善本書号 7331)。繆荃孫旧蔵本も上巻のみであり、汪啓淑旧蔵本よりも保存状態は悪く(第1冊の葉1~5は版心を失っている)、汪啓淑旧蔵本が含む「説文解字六義之圖」も無い。したがって保存状態としては汪啓淑旧蔵本のほうが良いが、繆荃孫旧蔵本は序文(趙撝謙序、張美和序)、平声葉14全体、去声葉01右頁を補うことができる。また、保存状態は良くないが、版木としては汪啓淑旧蔵本以前に刷られたと思われる箇所もある。たとえば入声葉13, 14で汪啓淑旧蔵本には版木の大きな割れが見えるが、繆荃孫旧蔵本には見えない。また、汪啓淑旧蔵本では墨釘である箇所が繆荃孫旧蔵本では空格であることが多く、汪啓淑旧蔵本では罫線を失っている箇所に繆荃孫旧蔵本では罫線が見える箇所もある¹。繆荃孫旧蔵本で補った小篆字形は ZX-FGB-0331~0356, -1043~1051, -1054, -1059~1061, -1063, -1065 である。

この他の資料としては、台湾国家図書館所蔵の清・呉騫旧蔵写本がある(登録号 rarecatx0223446)。この写本もまた上巻しか無いため、前述の明初刻本のどちらかを祖本とするものだと思われるが、明初刻本から判読可能な小篆を採ることができなかった小篆4字、ZX-FGB-0344~0345, ZX-FGB-1337~1338を呉騫旧蔵写本から採取した。

謝辞

本表は科研費課題番号 19K12716 の成果です。訪問による文献調査が困難な社会情勢下にあり、邱永祺先生、陳永聡様、また北京國家圖書館、広島大学図書館の方々に多大なる御助力を頂きました。

参考文献

許慎: 『説文解字』, 北京國家圖書館所蔵南宋元修本影印, 國學基本典籍叢刊, 國家圖書館出版社, 2017, ISBN 9787501360253

李燾: 『宋板重刊説文解字五音韻譜』, 中國書店, 2012, ISBN 9787514904192

張有: 『復古編』, 黄丕烈旧蔵影宋写本, 四部叢刊三編

張有: 『復古編』, 北京國家圖書館所蔵好古齋元刊本, 中華再造善本, 北京圖書館出版社, 2004, ISBN 7501325472

張有・呉均: 『増修復古編』, 北京國家圖書館所蔵 明刊・汪啓淑旧蔵本, 善本書號 7332, 北京圖書館古籍珍本叢刊 5 卷, ISBN 7501307032

張有・呉均: 『増修復古編』, 北京國家圖書館所蔵 明刊・繆荃孫旧蔵本, 善本書號 7331

張有・呉均: 『増修復古編』, 臺灣國家圖書館所蔵 清・呉騫旧蔵写本, 登録号 rarecatx0223446

変更履歴

1.0 (2022/05/11) 対照表のみ公開。

1.1 (2022/05/13) 本解題を追加。

¹ 補修のために加えた墨釘が脱落したという可能性もあるが、この2つの資料の場合は、版木の割れや罫線の有無を考え合わせると空格になっている状態が補修前と考えると良いであろう。